平安京跡発掘調査概報

平成４年度

京　都　市　文　化　観　光　局

序

四季折々に変化する趣のある景色と貴重な文化財が調和している京都は，日本の古都として毎年多くの入洛者を迎えます。私達が馴れ親しんだこのような風景は，平安建都以来の人々の営みの積重ねから生まれてきたものでした。

このような文化遺産のほかに，土に埋もれ，姿を隠してしまった文化財が数多くあることをもっと知って頂きたいと思います。また，これらを愛護し，将来へ正確に伝えて行くことが今を生きるわたしたち市民の課題であろうと思います。

このようなことから，埋蔵文化財の発掘調査を通して平安建都1200年の歴史のなかで失われ，姿を消した京都の文化遺産を現代に蘇らせ，ここから新しい文化を創造する糧と方法を学ぶことが，課題に答える方法の一つではないかと考えています。

本書は，京都市が平成４年度に文化庁の国庫補助を得て実施しました埋蔵文化財発掘調査の報告書であり，調査にあたって，ご支援とご協力を頂いた市民の皆様に心から感謝いたしますとともに，本書が文化財保護に役立てられることを期待いたします。

平成５年３月

京都市文化観光局

例　　言

1　本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施した、文化庁国庫補助による平成4年度の概要報告である。

2　調査地点は下記のとおりである。

平安宮中務省　上京区丸太町通千本東入中務町491番地

3　本書の執筆は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ－1、Ⅳ－2を木下保明、Ⅱ－2を上村和直、Ⅳ－1を長宗繁一が担当した。編集は、木下保明が担当した。

4　整理作業および本書の作成作業には上記の執筆者のほか以下の者が参加した。

出水みゆき、上田栄治、太田吉男、幸明綾子、多田清治、田中利津子、西大條哲、村上　勉、吉崎　伸

5　写真は村井伸也が担当した。

6　測量基準点は、京都市遺跡測量基準点を使用し、本調査における測量点の設置は、辻純一、宮原健吾が行った。本書中で使用した方位および座標の数値は平面直角座標系Ⅵによる。座標の数値はm単位である。標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。

7　本書で使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』に準じた。

8　本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の都市計画基本図「聚楽廻」（縮尺1／2500）を複製して調整した。

9　遺構の表記については、次のような略記号を用いた。

ＳＤ（溝）、ＳＫ（土壙）、ＳＸ（その他）

本 文 目 次

平安宮中務省

I　調査経過 …… 1

II　遺　　構 …… 2

1　概　　要 …… 2

2　古墳時代の遺構 …… 2

3　平安時代前期の遺構 …… 3

4　平安時代中期の遺構 …… 3

5　室町時代以降の遺構 …… 4

III　遺　　物 …… 4

1　土 器 類 …… 4

2　瓦　　類 …… 6

IV　ま と め …… 8

1　これまでの中務省跡の調査について …… 8

2　小　　結 …… 9

図 版 目 次

図版一　遺跡　第一遺構面実測図
図版二　遺跡　第二遺構面（平安時代前期）実測図
図版三　遺跡　第二遺構面（古墳時代）実測図
図版四　遺跡　第二遺構面（平安時代前期）全景（南から）
図版五　遺跡　1　第一遺構面全景（南から）
　　2　ＳＤ－8全景（東から）
図版六　遺跡　1　第二遺構面（古墳時代）全景（南から）
　　2　ＳＫ－20全景（東から）
図版七　遺物　土器
図版八　遺物　土器・軒瓦

挿 図 目 次

図１　調査位置図……1
図２　東壁断面図……2
図３　ＳＫ－20平・断面図……3
図４　土器実測図（1）……5
図５　土器実測図（2）……6
図６　軒瓦実測・拓影図……7
図７　中務省復原図……8
図８　建物復原図……9
図９　中務省跡主要遺構位置図……10

表 目 次

表１　中務省跡発掘調査一覧……11

Ⅰ　調査経過

調査地は、上京区千本丸太町の交差点から東へ約150ｍの北よりの地点である。当地は平安宮中務省の北辺中央からやや西よりの曹司（内舎人）の部分にあたる。附近の調査では、これまで 10数次にわたって調査が実施され平安時代の建物の一部や北限築地の内溝や敷地内の区画溝や築地などを検出している。当地に住宅兼事務所の建設が予定された。そのため工事に先だって試掘調査を実施したところ、平安時代の遺構が良好に残存していることが判明したので、発掘調査を行うことになった。

発掘調査は東西5.5ｍ・南北12ｍの調査区を設けて実施し、平安時代中期の礎石建物、中務省北限築地の内溝、平安時代前期の掘立柱建物、築地の内溝、古墳時代の柱列、竪穴住居などを検出した。最後に南東隅に、４㎡程の拡張区を設けて補足調査を実施し調査を終了した。

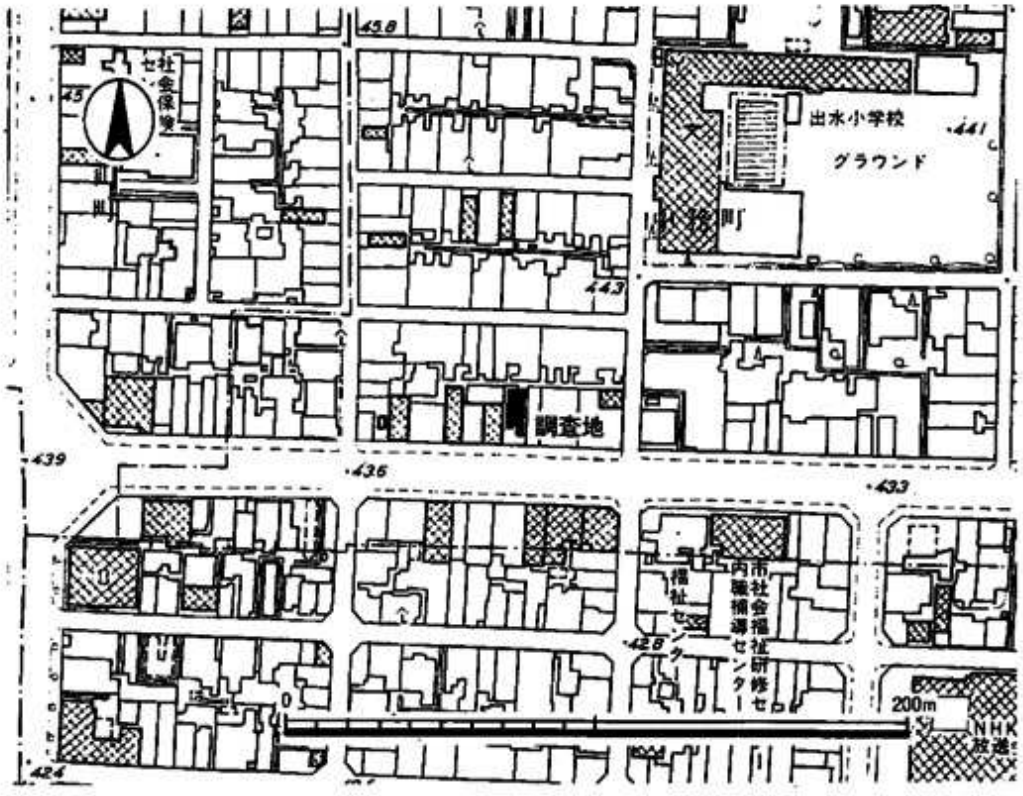


図１　調査位置図

II 遺　　構

1．概　要

調査地の基本層序は盛土が0.15m、次に平安時代の遺物包含層である褐色砂泥（第1層）が0.1～0.2m堆積、その下が第一遺構面となる。第一遺構面では、灰黄褐色砂泥を0.2m積み上げた低い盛土の上で礎石建物とその北辺に堆積した瓦溜り、北限築地の内溝などを検出した。その他に室町時代以降の柱穴・土壙などを検出した。

灰黄褐色砂泥を除去すると地山の黄褐色粘質土となり、この面が第二遺構面となる。第二遺構面では平安時代前期と古墳時代後期の遺構を検出した。平安時代前期の遺構には掘立柱建物の柱跡、北限築地の内溝があり、古墳時代後期の遺構には土壙、柱列、溝、竪穴住居の一部がある。

2．古墳時代の遺構

柱列　座標北に対して約23°西に振った掘立柱列を2間分検出した。掘形は一辺0.5～0.7mの方形で、深さ10～20cmを測る。柱間距離は2.5mである。

SD—24　柱列と同じ方向の溝で、その東肩部を検出した。幅1.3m以上、深さ0.45mを測る。埋土は上下2層に分かれる。

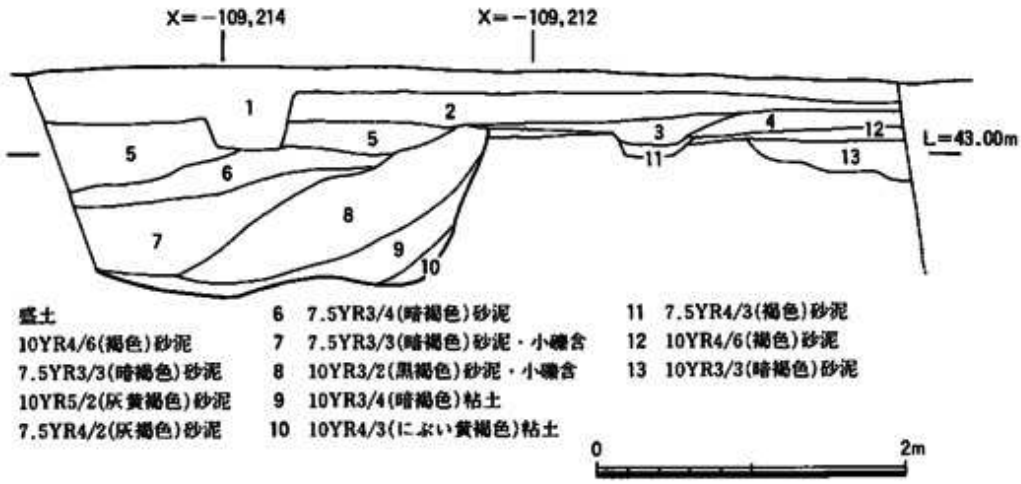


図2　東壁断面図

ＳＫ－20　築地内溝の張り出し部で検出したもので竪穴住居のカマドになると思われる。上部構造を失なうが、楕円形を呈し、内部には焼土と炭が堆積し、支脚としての石が据付られている。

また、カマドの周辺で竪穴住居の床面と思われる土層を一部検出した。

土壙群　調査区の中央よりやや北よりの部分で、複雑に切り合った不定形の土壙群を検出したが、その性格は不明である。

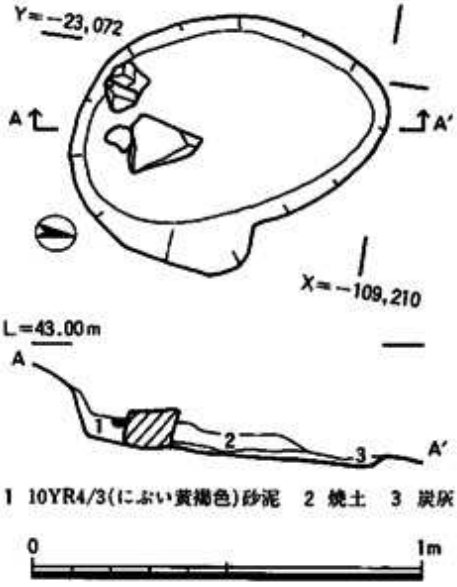


図３　ＳＫ－20平・断面図

３．平安時代前期の遺構

ＳＤ－８　中務省北限築地の内溝で、南肩部を検出した。調査区東辺で幅2.7ｍ以上、深さ1.1ｍを測るが、西辺では狭くなり、台状の張り出しをもつ。堆積層は６層に分かれ、第２～４層は小礫を比較的多く含む土層で、遺物も多く含まれていた。これらの層は溝を埋立た時のもので、土層観察から一気に埋められたことがうかがえる。第５・６層は溝が機能していた時に溝の肩口から崩れ落ちた土層である。また、この溝の一部は次の礎石建物の時期に存続していた可能性がある。

掘立柱建物　掘立柱建物の東の妻部を検出した。附近の調査で検出された柱穴とのつながりから考えると身舎の部分が２間×７間の東西棟で南に廂の付く建物に復原できる。身舎の柱間は桁行2.4ｍ・梁行2.7ｍ、南の廂の出は3.3ｍを測る。柱穴の掘形は一辺0.7～0.9ｍの隅丸方形で、深さ約40cmを測る。

４．平安時代中期の遺構

礎石建物　掘立柱建物が廃絶後に約20cmの土を盛り上げた土壇の上に造られた柱穴を２個検出した。方形のものと円形のものがあるが、どちらも深さが10cm前後と浅い。付近の調査からみて礎石建物の据え付け穴と考えられるが、他ではみられた根石は検出できなかった。また、方形の柱穴は掘立柱建物の柱穴と完全に重なり合っている。

ＳＸ－１　礎石建物の土壇の北辺に沿って形成された瓦溜りである。瓦は建物の軒から落ちた状態で堆積したのではなく、建物から崩れ落ちた瓦を基壇の周辺に二次的に廃棄し

たものと思われる。

ＳＤ—14　礎石建物の盛土を南北に横切る幅25～30cm、深さ20cmの溝を検出した。この溝は盛土の上では黄色の粘土の帯として認識されていたが、第二遺構面で初めてそれが溝になることが判明した。性格については不明である。

ＳＫ—9　ＳＤ—８の層部を切って形成された土壙である。不整円形を呈し、南北幅２m、深さ0.8mを測る。埋土は上層が褐色砂泥、下層が黒褐色砂泥の２層にわかれる。

５．室町時代以降の遺構

径20cmと40cm前後の円形の柱穴または土壙を検出している。根石をもつ柱穴もあるが、建物としてまとまるものはない。

Ⅲ　遺　　物

遺物は、整理箱で46箱出土した。遺物の大半は北限築地内溝と瓦溜りから出土した瓦類で、軒丸瓦１点、軒平瓦２点、緑釉瓦片１点などがある。平安時代の土器類には、土師器の皿・杯・高杯・甕、須恵器の杯・蓋・甕・壺、黒色土器、緑釉陶器の椀・耳杯、灰釉陶器の皿・蓋・壺、青磁の椀などがあり、古墳時代の土器類には、土師器の近江型とよばれる長胴の甕・杯、須恵器の杯・蓋・甕・鬼などがある。以下、図示することができた土器類と瓦類について述べる。

１．土 器 類

第１層出土土器（７・８・11・17）（７）は底部が若干中央で凹む円盤状の削り出し高台の緑釉陶器で、素地は軟質で淡黄褐色の釉がかかる。底部に「大」字が線刻されている。（８）も緑釉陶器の蛇の目高台で、器地は須恵質で緑褐色の釉が施されている。(11) は須恵器の蓋で、天井部はヘラ削り、他は回転を利用したナデ調整を施す。(17) は須恵器の杯身で、平らな底部に外弯気味に立ち上がる口縁部からなり、口縁端部はまっすぐにのび丸くおわる。底部外面は無調整で、底部内面は回転を利用したナデ調整ののち不定方向のナデを施す。口縁部内外面は回転ナデを施す。

ＳＤ—８出土土器（１～６、９、10、12～16、18～21）（１～６）は土師器、（９・12）は灰釉、他は須恵器である。（１）は蓋で、天井部はゆるやかに盛り上がり、口縁端部は内

側に若干肥厚する。内面は回転ナデ、外面は丁寧なヘラ磨きを施す。赤褐色を呈する。（2）は高台を持つ杯で、体部・口縁部はほぼまっすぐに外側にのびる。口縁端部は丸くおさめる。内面から口縁部外面にかけてナデを施すが、外面は摩滅しており詳細な観察はできない。（3）は皿で、口縁部はやや外反し端部は丸くおさめる。内面から口縁部外面にかけてナデを施し、体部外面はヘラ削りである。（4～6）は杯で、平らな底部から外弯気味に口縁部が外上方にのびる。内面から口縁部外面にかけてナデを施し、体部外面はヘラ削りを施す。（9・10・12～14）は杯蓋で、（9・10・12）は天井部は丸く持ち上がり頂部に扁平な宝珠形のつまみがつく。口縁部は内方へ若干折れ込むように屈曲する。天井部はヘラ削り、他は回転ナデを施す。（13・14）は天井部は平坦で明瞭な稜をもって口縁部へ屈曲する。端部は下方につまみ出す。天井部はヘラ削り、他は回転ナデを施す。（15・16）は高台

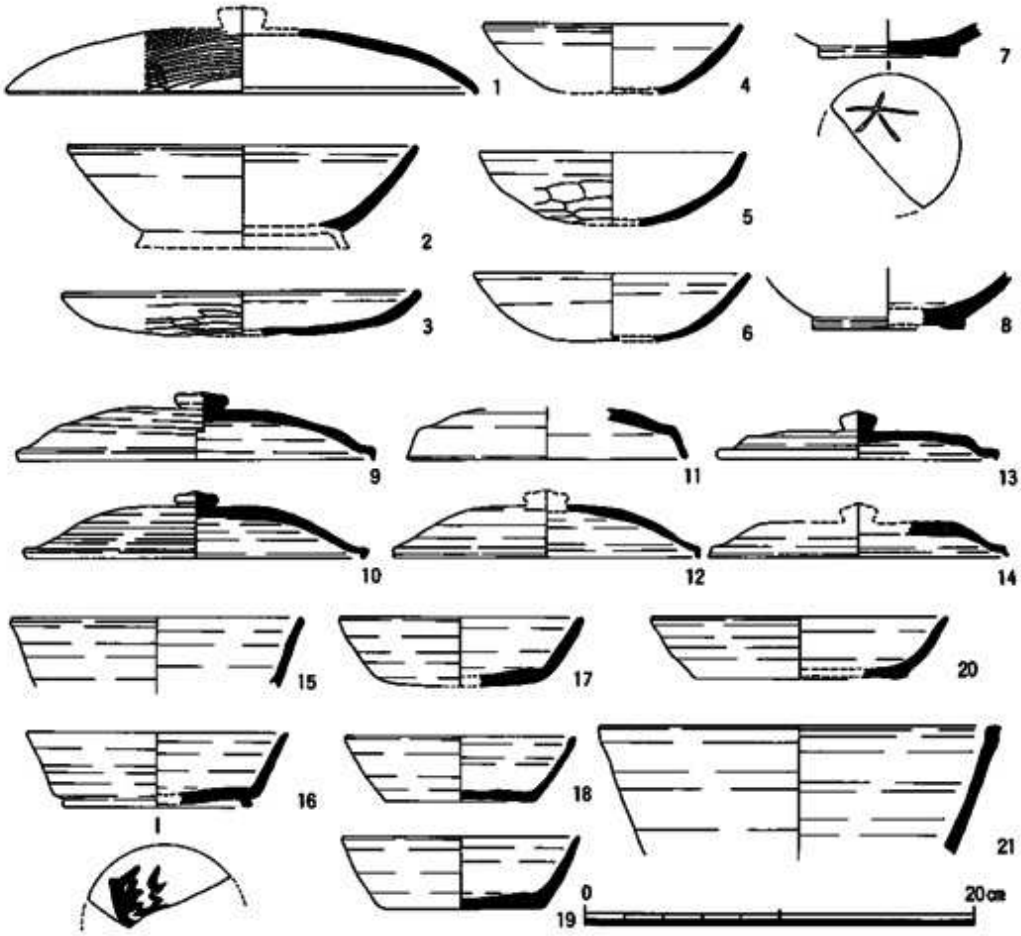


図4　土器実測図（1）

をもつ杯身で、口縁部は内弯気味に外上方にのび、口縁端部は丸くおわる。(16) の底部には「監」の上部とみられる墨書が残っている。(18～20) は須恵器の杯身で、平らな底部に外弯気味に立ち上がる口縁部からなり、口縁端部はまっすぐのび丸くおわる。底部外面は無調整で、底部内面は回転を利用したナデ調整ののち不定方向のナデをほどこす。口縁部内外面は回転ナデを施す。(21) は鉢で、体部が直線的に外上方にのび、口縁は直立する。内外面とも回転ナデを施す。

図5　土器実測図 (2)

ＳＤ—24出土土器 (22・23)　どちらも須恵器である。(23) は杯身で、底部と体部の境は明瞭で、体部は外弯気味に外方にのびる。受け部は外方へ開き狭い平坦面をつくり立ち上がりは低く内傾する。底部はヘラ切りのまま無調整で、他は回転ナデによる調整を施す。(22)は口頸部は短く、口縁端部は外方に肥厚し、端面は平坦である。頸部にカキ目を施した上に自然釉がかかる。他は回転ナデを施す。

2．瓦　類

瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦があるが、大半を丸瓦・平瓦が占め、軒瓦は少ない。軒瓦は軒丸瓦１種１点、軒平瓦２種２点が出土している。

軒丸瓦 (24)　蓮弁は高く盛り上がり、子葉を配す。弁には輪郭線がめぐる。間弁は三角形で短い。中房は低い凸中房で、蓮子数は１＋６。外区は珠文帯で、弁央と間弁に対応して16個配する。珠文帯の両側には圏線がめぐる。外縁は三角縁で、内面に線鋸歯文を配する。笵型は不明である。瓦当裏面上部に溝をつけ、丸瓦を入れて接合している。丸瓦凸面側には多量の補足粘土を用いるが、凹面側にはほとんどみられない。瓦当はかなり厚い。瓦当部上半・下半タテヘラケズリ、裏面タテヘラケズリで上部のみナデ。丸瓦部凸面タテヘラケズリ、凹面タテナデ、側面ヘラ切り後タテナデ。胎土中に砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で灰色を呈する。平城宮6291Ａ形式と同笵であろう。

軒平瓦 (25・26)　(25) は均整唐草文軒平瓦。内区は３回反転外向唐草文で、中心文は不明である。主葉は強く巻き込むが、子葉は巻きが弱い。３回反転目の主葉は脇区に接する。上・下・脇区は二重圏線である。外区には笵キズが多くみられる。笵型は不明である。曲線顎で、平瓦広端凸面に補足粘土を用いて瓦当部を成形する。

瓦当部は、凹面・凸面・裏面をナデ、側面はタテナデ。平瓦部凹面ナデで布目圧痕がある。凸面・側面は不明である。胎土は細砂を多く含み、焼成は軟質で灰色を呈する。平城宮6663C形式と同笵であり、平城宮からの搬入瓦である。

(26) は唐草文軒平瓦。内区は唐草文である。上外区は粗い珠文帯で、珠文は楕円形を呈する。笵型は不明である。平瓦広端部凸面に補足粘土を用いて瓦当部を成形する。

瓦当部凹面ナデ。平瓦部凹面は布目が残り、凸面は縦方向の縄タタキ痕がある。胎土中に細砂・砂粒を含む。焼成はやや軟質で、表面は黒灰色、内部は灰色を呈する。平城宮からの搬入瓦と推定できるが、形式は不明である。

今回の調査では軒瓦はわずかしか出土しなかったが、そのいずれもが平城宮からの搬入瓦と考えられ、特徴的である。平安宮内においては、これまでに内裏・大極殿・朝堂院・太政官・中和院・中務省・造酒司などが搬入瓦の多く出土する地域として指摘されている(注1)。その中でも中務省は特に多く、建物北限付近の調査（注2）では平城宮・難波宮搬入瓦が平安時代の瓦を上回って出土している。旧都からの搬入瓦では、中務省・太政官などの官衙地区では大極殿・朝堂院などとは異なり、平城宮からの搬入瓦の占める割合が高い。

注1　鈴木久男「平安京右京七条一坊の軒瓦について」『長岡京古瓦集成』向日市教育委員会　1987年

2　前田義明「平安宮中務省」『平安京跡発掘調査概報』(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1987年

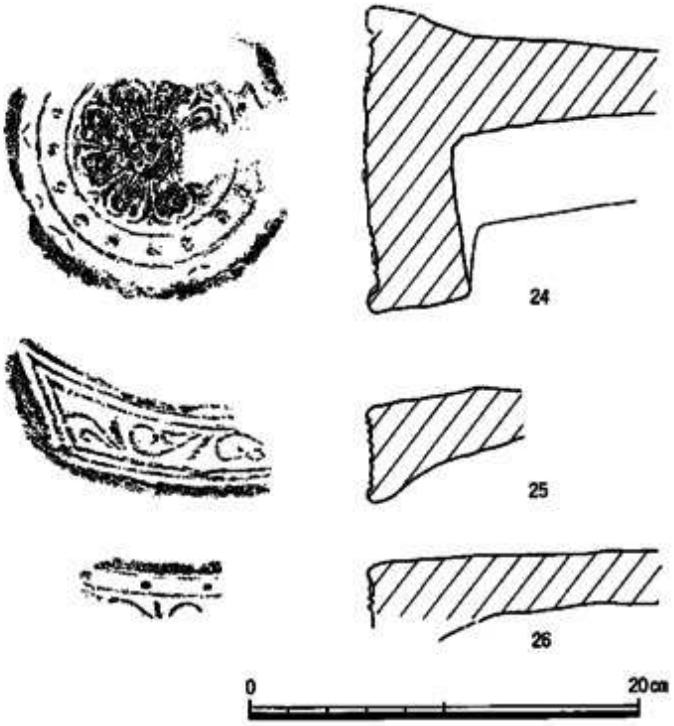


図6　軒瓦実測・拓影図

Ⅳ まとめ

1．これまでの中務省の調査について

中務省に関係するこれまでの主要な調査は今回調査分を含め17箇所（表1・図9参照）におよんでいる。平安宮の他の官衙にくらべ調査数、検出遺構数とも多く、小規模調査を積み重ねることにより徐々にではあるが調査成果を得つつある。特に現在の丸太町通に面する一帯は、中務省の北半部にあたり、内舎人・監物などが位置していた。以下にこれまでの報告書からその成果を要約するが、検出した遺構は平安時代前期・中期を中心に複雑に重複しており、各時期を整理するまでにはいたっていない。

中務省の規模　中務省の範囲については、調査地16で中務省北西隅を検出し北限および西限を決めることができた。これによると、北限は中御門大路南築地の延長線上に位置していることが実証できた。

このことから東限築地の検出例はないが、中務省東限は壬生大路西築地の延長と想定できる。したがって検出した西限築地との寸尺関係で中務省の東西幅は築地心々で57丈（約170.4m）を得ることができた。

南限については明確な検出例はないが、手がかりとして昭和63年度に実施した太政官北限の調査（注10）で太政官の南北幅が40丈であること、中務省南限築地との丈数が4丈以上あること、さらに中務省南限に関係するとみられる東西方向に走る溝跡の検出などから太政官と中務省との間は7丈と推定するにいたった。その結果、中務省の南北幅は現段階では37丈と考えるのが最も妥当であろう。

中務省の区画　中務省の中を区画する遺構には、北限に接する位置で実施した各調査地で築地内溝を検出した。また、内部を南北・東西に区画する築地や溝を検出している。

調査地11と調査地13の2箇所で南北に通る築地を検出した。調査地11のものは中務省の東西幅57丈を西に40丈、東に17丈に区画する位置にあたる。調査地13のものは、前述の40

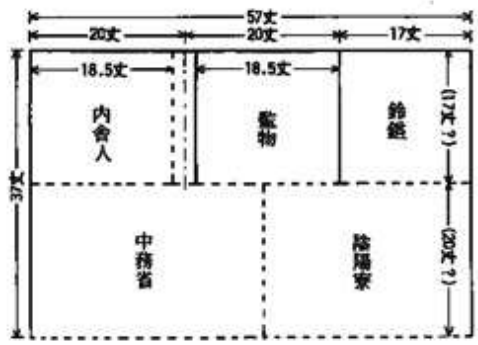


図7　中務省復原図

丈を２分する中心線上に幅３丈の小路を想定したとき東側築地の位置となる。

調査地２・９・12・８では東西方向に通る一連の溝を検出した。この溝の北側に東西方向の築地を想定することで、南北幅37丈の中務省を北に17丈、南に20丈に分けることができることになる。

以上の関係を整理すると図７の配置関係を想定することができる。この関係は平安宮古図の中にも近似したものがある(注11)。もちろん最初に述べたように、時期的な区画の変更や変遷が未整理であるため、推測の域をでない概略図であることを述べておきたい。この関係を裏付けるものとして、調査地５で出土した「内舎人」および今回の調査地で出土した「監（物）」の２点の墨書土器があり、付近にこれらの曹司が位置したことにはまちがいないであろう。

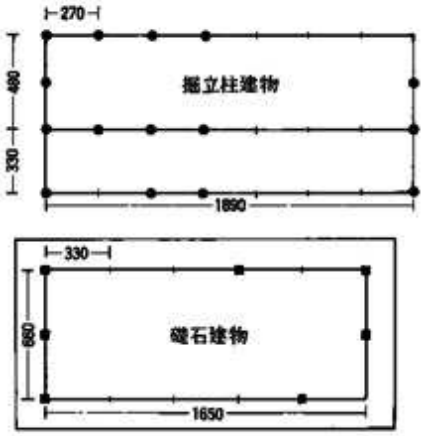


図８　建物復原図

建物跡　今回の調査成果で掘立柱建物を１棟復原できた。この建物は前期に建てられ中期には基壇をもつ瓦葺の礎石建物に建て替えられている（図８）。

掘立柱建物の規模は東西棟で身舎桁行７間、梁間２間で南に廂が付く。桁行は2.7ｍ、梁行は2.4ｍ、廂3.3ｍに復原できる。この建物と同じ規模とみられる掘立柱建物を調査地11でも西妻の部分のみではあるが検出している。北限から同じような位置に建てられ、規模からしてもまた区画の中の位置関係からみても各曹司の中心的な建物と推測される。

礎石建物はすでに既往の調査で復原できており、今回の調査では２箇所で礎石据え付け穴の痕跡を検出した。東西棟で桁行５間、梁間２間であることがわかる。柱間は桁・梁とも3.3ｍを測る。基壇は調査地４で確認したが、他の調査地では削平を受け明確ではない。周辺には瓦の堆積が各所でみられ瓦葺の建物とわかる。この建物は若干東に振れるようで、調査地13の築地も同じような傾きをもつようで、今後の調査成果と合わせ時期を含めて検討していく必要があろう。

２．小　結

今回の調査では、中務省関連の遺構として新旧２時期の遺構を検出した。これは従来の附近の調査と一致する。特記すべきことは、今回の調査で平安宮造営当初の中務省北辺の

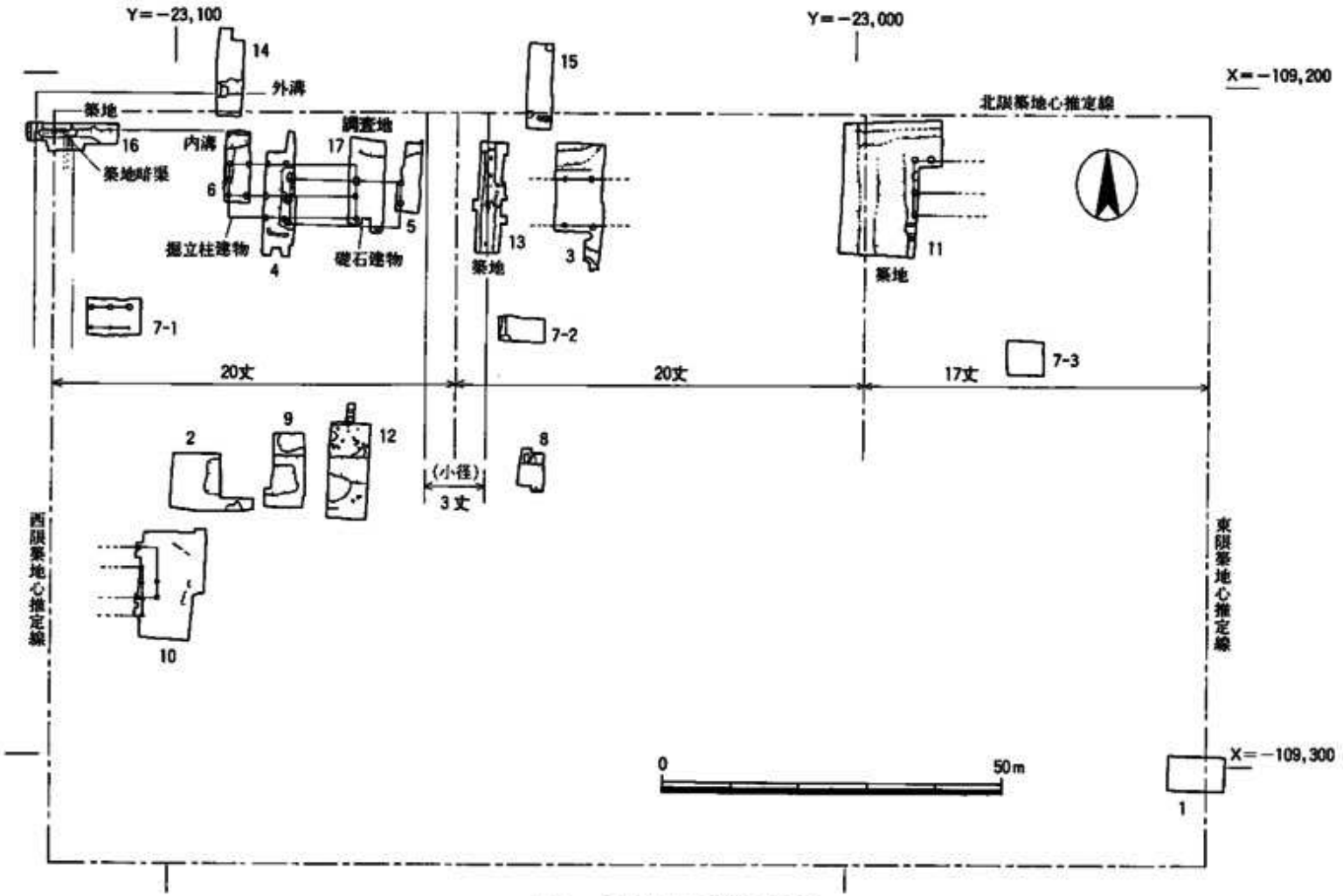


図9　中務省跡主要遺構位置図

表1　中務省跡発掘調査一覧

番号	調査年度	主要遺構	主要遺物	備考
1	1964		軒瓦	注1
2	1978	土壙	一括土器	注2
3	1978	北限築地内溝 東西棟建物	軒瓦	注2
4	1979	北限築地内溝 東西棟掘立柱建物 東西棟礎石建物	軒瓦	注3
5	1980	北限築地内溝 東西棟礎石建物 古墳時代後期土壙	墨書土器「内舎人」	(財)京都市埋蔵文化財研究所調査
6	1980	北限築地内溝 東西棟掘立柱建物 南北溝	緑釉陶器火舎 墨書土器「□□省」 軒瓦	注4
7	1981	掘立柱建物 南北溝、瓦溜 古墳時代後期竪穴住居		(財)京都市埋蔵文化財研究所調査
8	1982	東西溝、土壙	軒瓦	注5
9	1986	東西溝、南北溝、土壙	軒瓦	注6
10	1989	掘立柱建物2棟 瓦溜	緑釉陶器火舎 軒瓦	注7
11	1989	北限築地内溝 南北築地・溝、瓦溜 東西棟掘立柱建物	緑釉陶器火舎 軒瓦、墨書土器	(財)京都市埋蔵文化財研究所調査
12	1989	東西溝、土壙	大量の瓦類、軒瓦 鴟尾	注7
13	1990	北限築地内溝 南北築地・溝、通路、暗渠	軒瓦	注8
14	1991	北限築地外溝（側溝） 礫敷路面（中御門大路）	軒瓦	注9
15	1991	北限築地 礫敷路面（中御門大路）	軒瓦	注9
16	1991	北限・西限築地、内溝 塼組暗渠、西限外溝	軒瓦	注9
17	1992	北限築地内溝 東西棟掘立柱建物 東西棟礎石建物	墨書土器「監」 軒瓦	当報告書

建物を１棟ではあるが、規模を確定することができたことである。身舎が２間×７間の東西棟で、南に廂が付く掘立柱建物に復原できた。以上、今回の調査の主な成果を述べたが、これによって中務省内の建物の変遷の一端を明らかにすることができた。

注１　「平安宮跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1964）』京都府教育委員会　1964

注２　「平安宮中務省跡」・「平安宮陰陽寮跡」『平安京跡発掘調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1979

注３　「平安宮中務省跡」『1979年度　平安京跡発掘調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1980

注４　「平安宮中務省跡」『昭和55年度　平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1981

注５　「平安宮中務省跡」『昭和57年度　平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1983

注６　「平安宮中務省」『昭和61年度　平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1987

注７　「平安宮中務省（１）」・「平安宮中務省（２）」『平成元年度　平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1990

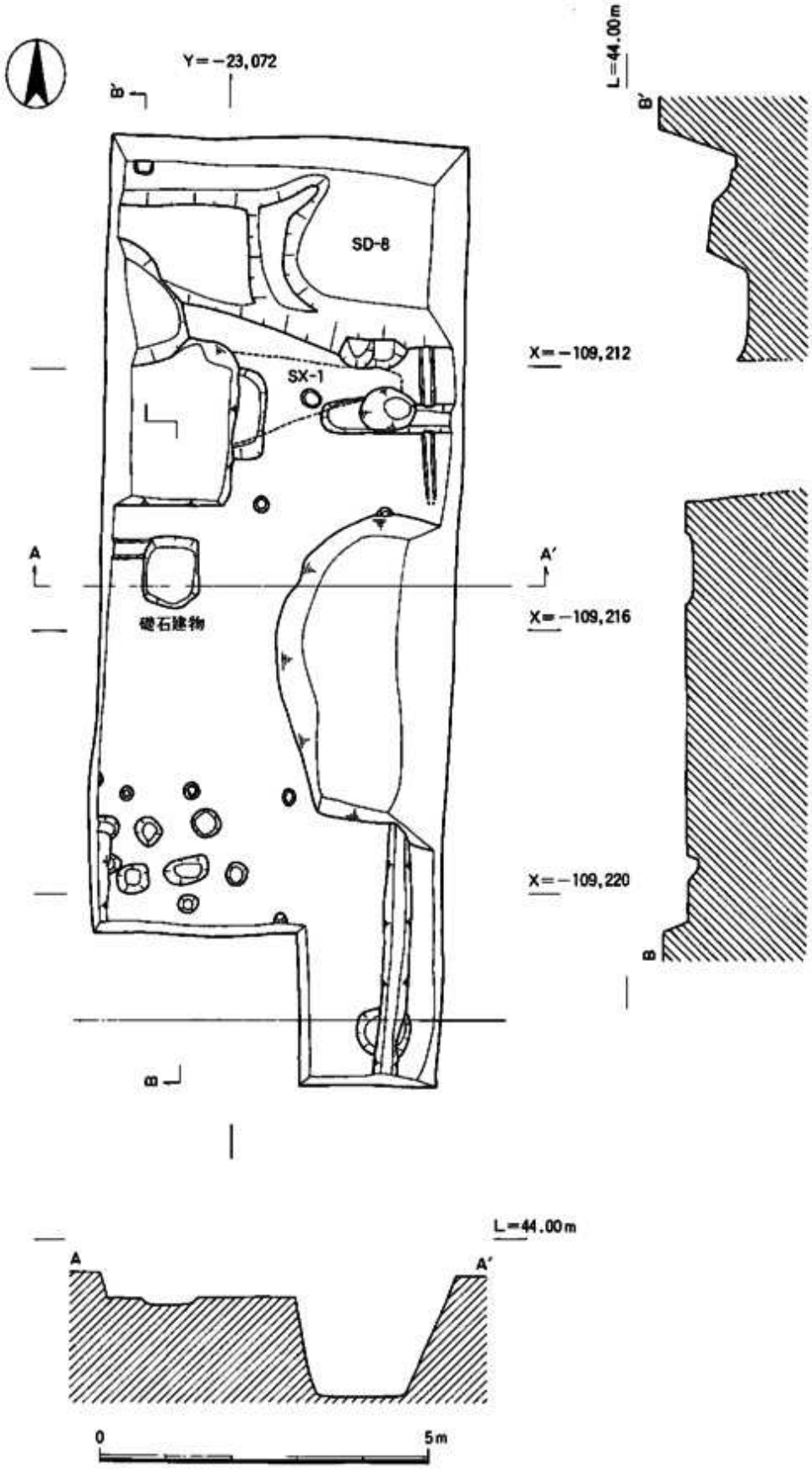
注８　「平安宮中務省」『平成２年度　平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1991

注９　「平安宮中務省（１）」・「平安宮中務省（２）」・「平安宮中務省（３）」『平成３年度　平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1992

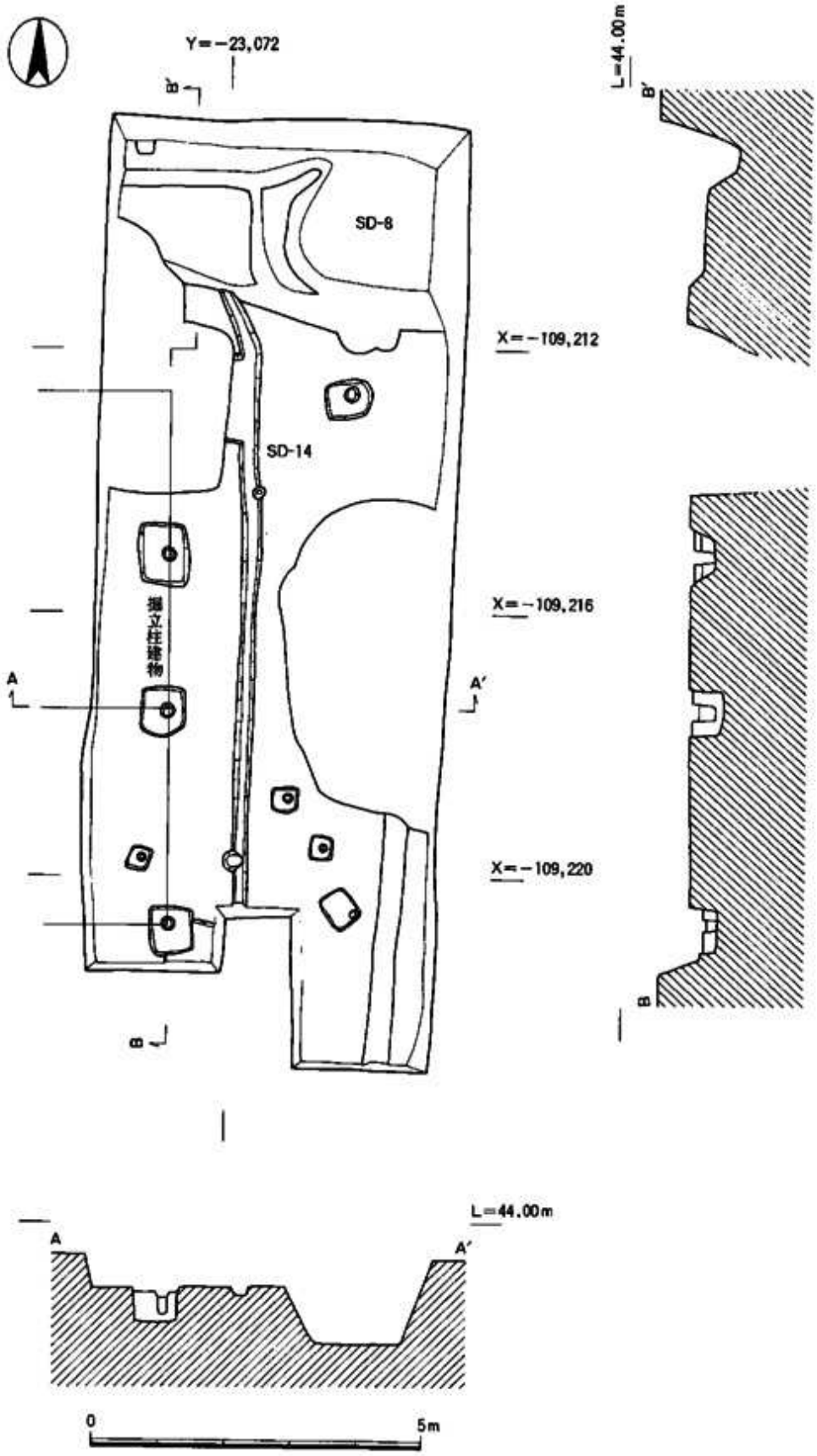
注10　「平安宮太政官（２）」『昭和63年度　平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1989

注11　陽明文庫蔵　宮城図

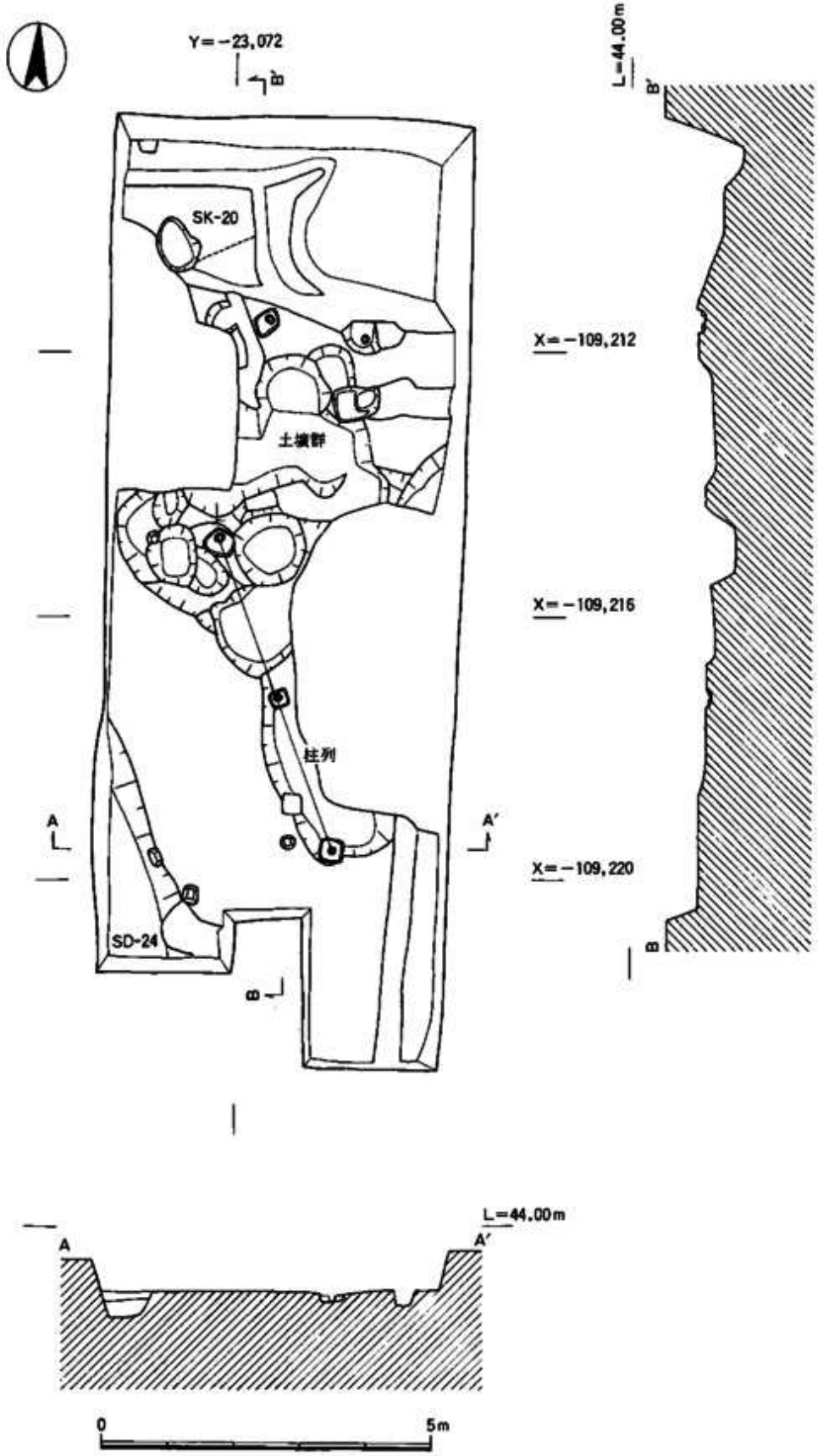
図　　版


Y=−23,072
B′
SD-8
SX-1
X=−109,212
A
A′
礎石建物
X=−109,216
X=−109,220
B
L=44.00m
B′
B
L=44.00m
A
A′
0
5m

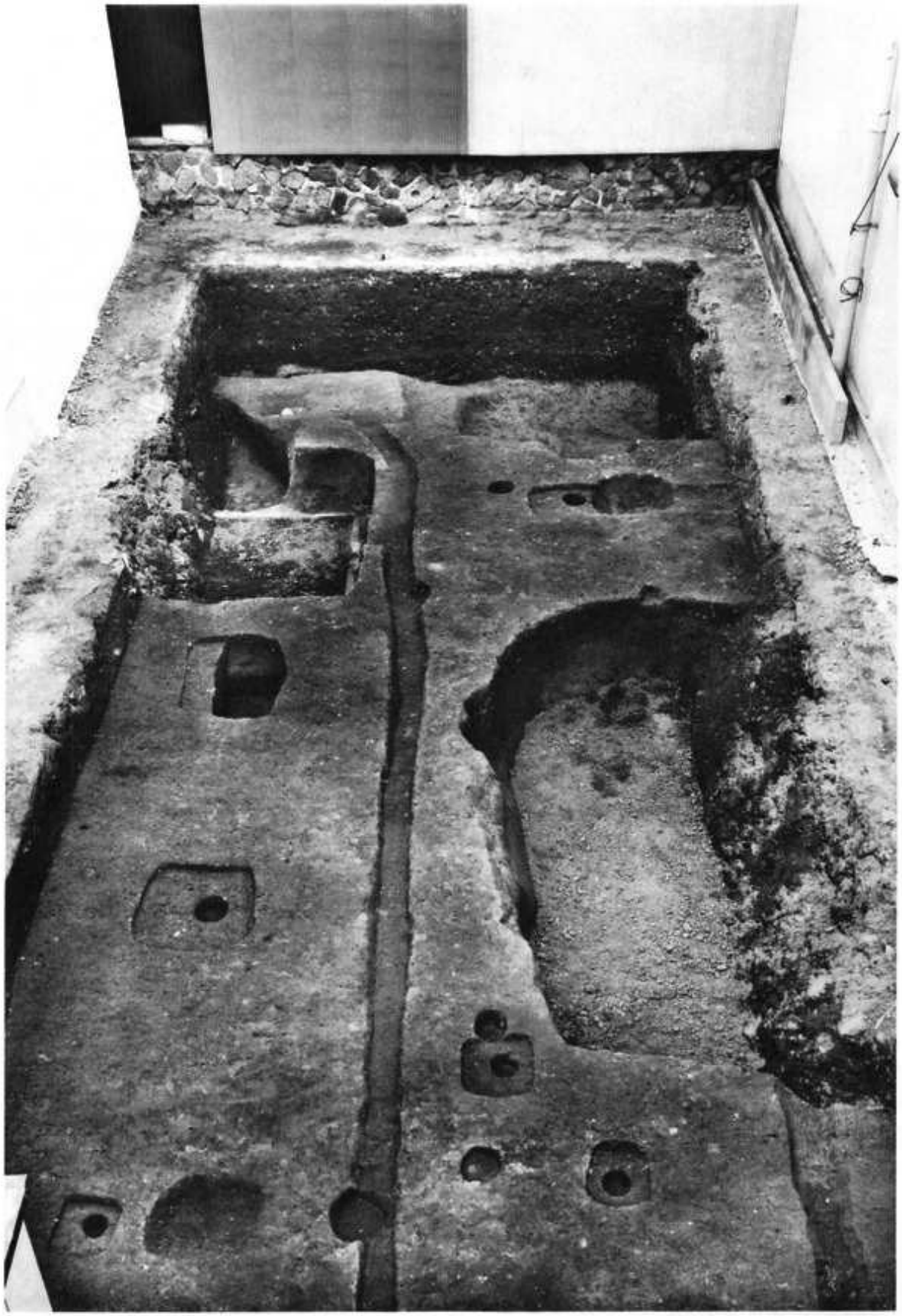
第一遺構面実測図



第二遺構面(平安時代前期)実測図



第二遺構面(古墳時代)実測図



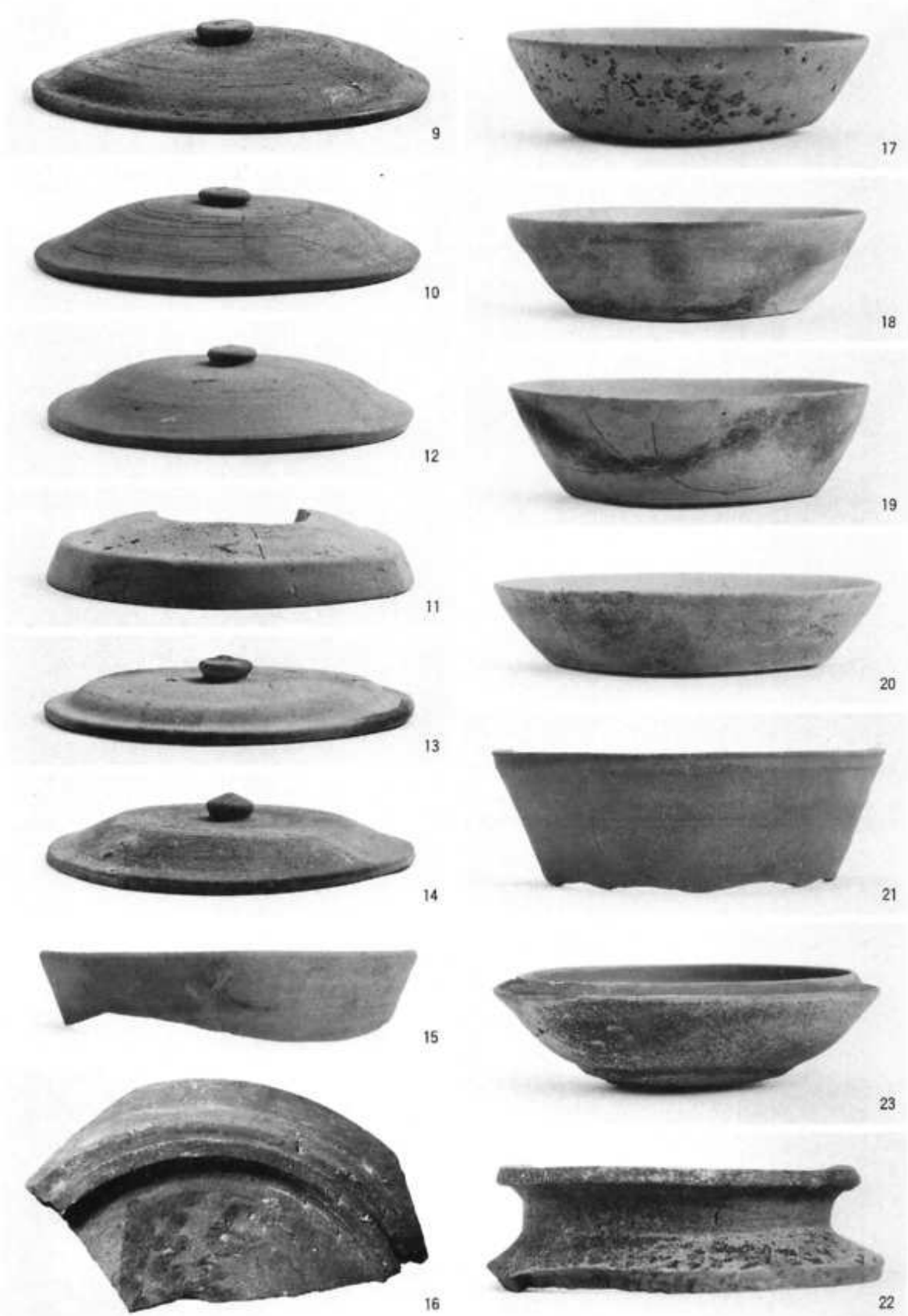
第二遺構面（平安時代前期）全景（南から）

1　第一遺構面全景（南から）

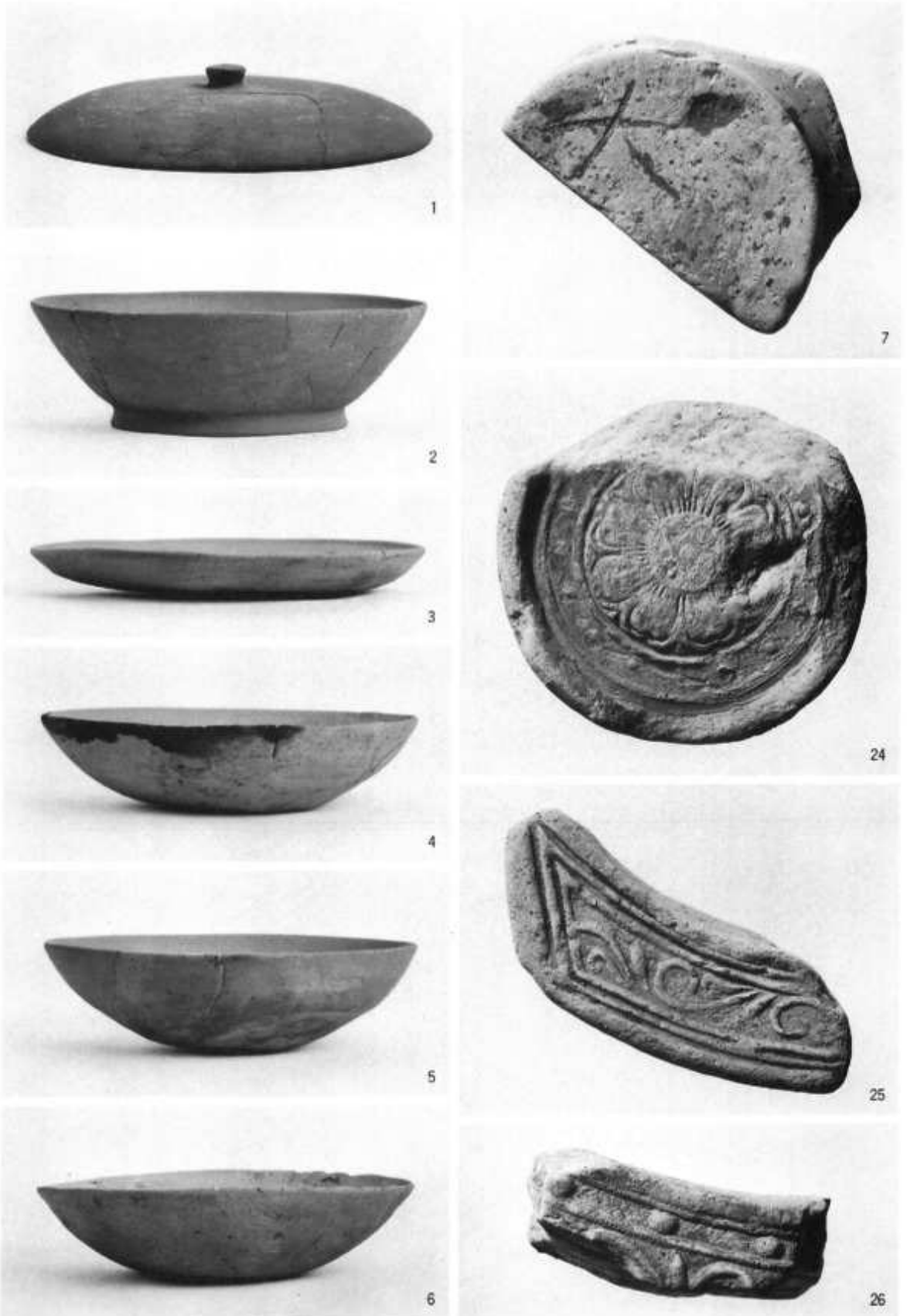
2　SD−8全景（東から）

1　第二遺構面(古墳時代)全景（南から）

2　SK-20全景（東から）



土器（須恵器）



土器（土師器：1～6，緑釉陶器：7），軒瓦（24～26）

平安京跡発掘調査概報

平成4年度

発行日　平成5年3月31日

発　行　京都市文化観光局

住　所　京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編　集　(財)京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川大宮東入元伊佐町265-1

TEL (075) 415-0521

印　刷　真　陽　社